

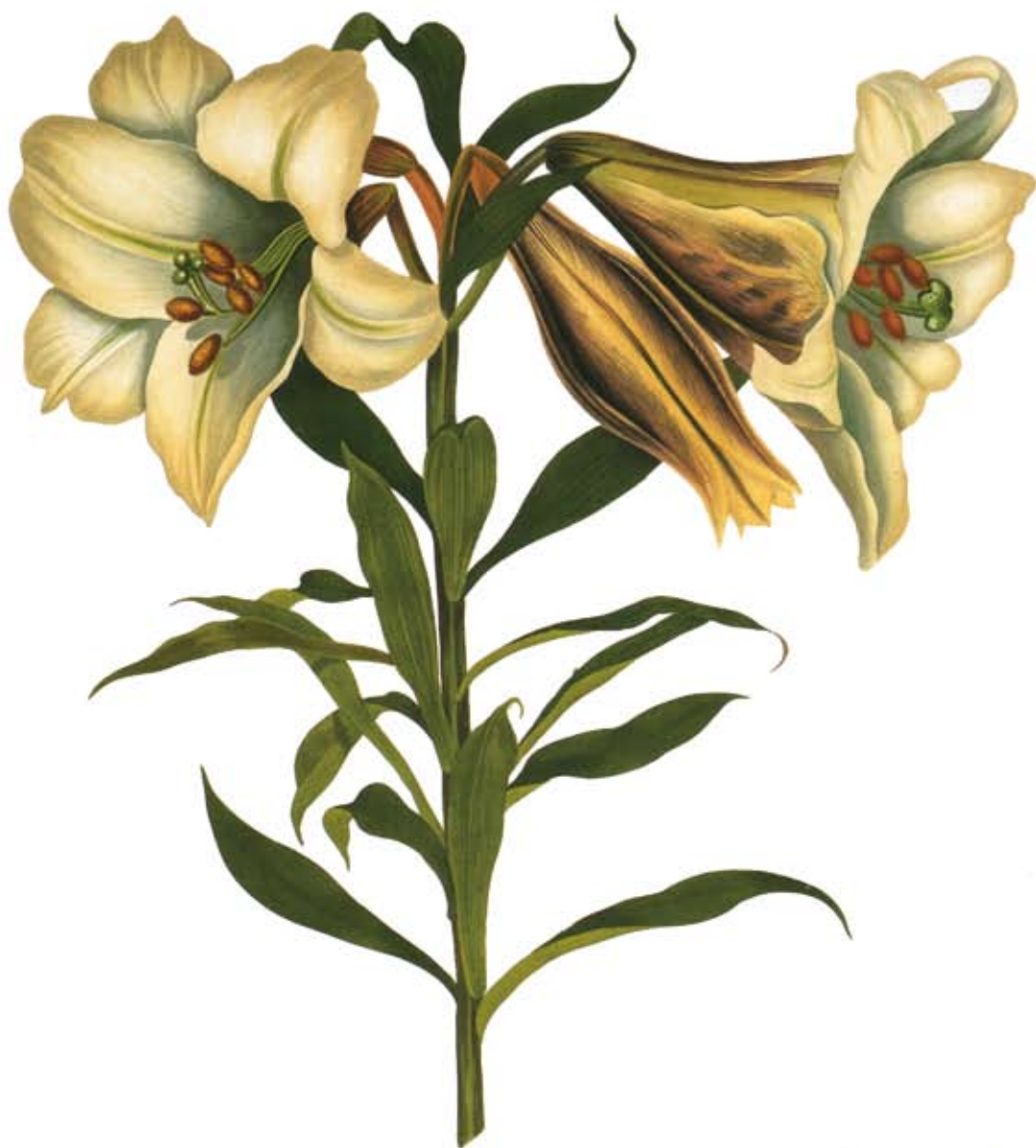
平成18年6月25日発行 (毎月1回 25日発行 No.195)

# RHSJ

The Japan Branch of  
The Royal Horticultural Society



英国王立園芸協会日本支部



LILIUM JAPONICUM.

2006

7

### チェルシー・フラワーショウ2006 <前編> 今年のガーデン・デザインの潮流

青空と雨がめまぐるしく入れ替わる典型的なイングリッシュ・ウェザーの中、開幕した本年のチェルシー・フラワーショウ。600を超える出展者、16万人近くにもおよぶ来場者は、傘とサングラスをかけ直しながら、5日間の植物と人々が織り成すドラマを楽しんだ。

写真・文 青山知花

今年の最大の特徴は、オーストラリア、ニュージーランド、フランス、アメリカ、そしてアフリカから、世界のガーデンスタイルや植物が展示されたことだ。また植物中心のクラシックなガーデンから、現代的でありながらも有機的な素材を使用し、時代を映したガーデンなど多彩な庭が一堂に会した。

RHSが提唱しているさまざまな環境問題の中でも、ここ数年、英国で深刻な問題になっている温暖化による水不足、気温上昇などへの意識の高さが、出展者の展示に反映された。スマートにデザインされた循環・排水システムや、雨水をためる水がめの配置や、暑さや日照りに強い植物が多用されていた。



独特なオレンジ色に錆させたスチールの外壁を背景に、コントラストをなす紫を中心にした色のアンサンブル。

硬質な素材スチールと柔らかさのある植物をあえて共存させ、ロマンチックになり過ぎない現代性を持った庭になっている。© Tomoca Aoyama



### The Daily Telegraph Garden by Tom Stuart-Smith

ステュアート・スミス氏のデイリー・テレグラフ・ガーデン。彼らしい多品種、多色使いでありながら全体の色調が整っており、他の庭と比べても植栽のボリューム感で圧倒。また箱型に区切られたいくつもの植え込みは、*Stipa gigantea*やピアデッド・アイリスなどの高さを利用し動きのある植栽になっている。

出展された19のショウ・ガーデン(ガーデン・デザイン)部門の中から選ばれた最優秀賞(Best in Show)は、入場者、関係者にも圧倒的人気であったステュアート・スミス氏のデイリー・テレグラフ・ガーデン。過去チェルシーに5回出展した庭が全てゴールドメダルを受賞し、英国王室の庭のデザインも手がけるキャリアの持ち主。左右の生垣と植栽を囲む露地以外を植物で埋め尽くした庭は、色彩も含めて西欧絵画を再現したような印象であった。

一般人気投票(BBC RHS People's Award)では、英国庭園史に多大な影響を残したジーキル女史とモーソン氏がデザインした庭園からピアドショー氏が着想を得て再現したウォームキャスト・ガーデンが選ばれた。日本からシック・ガーデン部門に参加した石原和幸氏の作品はこの部門における最優秀賞(Best Chic Garden)を受賞した。今月号では、ショウ・ガーデン部門で今年の特徴を現した作品を中心に紹介する。



## イングリッシュ・ガーデンと 現代的なガーデン 相違点と共通点

ここに紹介するスタージャン氏とピアドショー氏はTVのガーデン番組に出演し著作活動などでも活躍中の2人。彼らにとってこれで3度目になるチェルシーで、対称的なデザインを発表、共にゴールドメダルを受賞した。ピアドショー氏の庭は修復中のイングリッシュガーデンの再現、それに対してスタージャン氏の庭は機能的で現代的。

この2つの庭はコンセプトや造形は違うが、細長く奥行きのある敷地の中央に配置されたプールや池の周りを囲む壁や植栽、庭の奥手にあるあずま屋の配置関係は大変似ている。



### Wormcast Garden "Growing for life" by Chris Beardshaw

ピアドショー氏の庭はモーソン氏(Thomas Mawson)とジーキル女史(Gertrude Jekyll)が、1920年代に手がけたボーバリッジ邸(Boveridge House)の修復プロジェクトのダイジェスト版ともいえる形で再現されている。(プロジェクトは現在も進行中)

モーソン氏のデザインは、スイレンの池や天使の像という彼のトレードマークを用いたフォーマルなスタイル。クラシックなあずま屋のレプリカや修復中の壁もそのままチェルシーに移設された。

一方、植栽はボーバリッジ邸で発見されたジーキル女史のオリジナル植栽プランを参考に女史の好んだ植物を用い、池の両サイドの草花のボーダーに再現された。園芸関係者の話では、この庭は英国の人々にとって心のふるさと的な存在であり、チェルシーの一般人気投票で一番人気になったのも容易にうなずける。



チェルシー・ガーデン部門では、庭が「自然」に仕上げられていることも審査の対象になる。最後の仕上げに石畳の隙間にシダを細かく株分けして植えることで、この庭がまるでここに古くからあるような効果を上げている。

## チェルシーの展示あれこれ

チェルシー・フラワーショウの展示には、品評会(展示品の評価と各賞の授与)や、博覧会(種々の商品や品種の展示)、見本市(新品種などの紹介)の要素があり、その展示規模、種類の多さ、クオリティーの高さゆえにチェルシーは世界屈指のフラワーショウとされている。展示は野外と屋内(グレート・パビリオン)に分かれている。なかでも来場者の注目を集めるのが、ガーデン・デザインを競う4つのチェルシー・ガーデン部門。

■ ショウ・ガーデン Show Gardensは敷地面積最大230㎡を使って競われ、敷地の造成から、建造物や池など水まわりの設営など大掛かりになる。出展希望者は、十分な経験と財政面を認められなければ出展は果たせない。これらの庭は、野外会場に点在するが、会場中央のMain Avenueに展示が許されることは、目抜き通りに店を出せるようなもの。広い道いっばいにテレビ中継関係者と来場者があふれる。

■ スモール・ガーデンには、次の3部門がある。シック・ガーデン Chic Gardensは、都会の限られた土地という設定で新しい発想の庭を作り、斬新さが競われる。シティー・ガーデン City Gardensは、都市生活者の余暇を考慮した庭をデザインし、その中にはルーフ・ガーデン(屋上庭園)も含まれる。コートヤード・ガーデン Courtyard Gardensは、郊外や田園地方の小さな敷地を想定した庭をデザインする。これらスモール・ガーデンは、部門により野外と屋内に展示される。

### The Cancer Research UK Garden by Andy Sturgeon

スタージャン氏の庭は、英国ガン研究所の依頼によりデザインされ、その理念が色濃くデザインに反映している。生活習慣を変えることで患者の半数がガンを防げるという調査結果を元に、エクササイズ(プールやジャグジー)や、健康を意識した食事(ハーブやブルーベリーなどの栽培)、直射日光を避ける(あずま屋とそれを囲む高木)という3つの要素を庭のデザインに取り入れている。ここにも人気の *Stipa* が多用され、プール周りの雰囲気を和らげている。

近代・現代の建築家に影響を受け、自然素材を生かした建築物を得意とするスタージャン氏らしいあずま屋。ブラインドのように仕上げられた梁には、上方から水が滴り落ちるようになっており、中央のカリフォルニアを思わせるプールと共に爽やかでクールな印象を持つ。



## 見せる庭と使う庭

最後に、前述のデイリー・テレグラフ・ガーデンと好対照な庭、中央部に大きな池をデザインしたエブレー女史の「裸足で庭を歩こう」ガーデンを紹介する。巻頭に取り上げた最優秀賞のデイリー・テレグラフ・ガーデンと「裸足で歩こう」ガーデン2つの庭を比べるだけでも、チェルシーのガーデン・デザインの幅の広さを見せてくれているようだ。料理で言うなら、フランス料理と精進料理ほど味が違う。前者が見せるための華やかな庭であれば、後者が実際に個人が使って楽しめる庭のようにも見られる。植物と建築の出会う場所である現代のガーデン・デザインは、さまざまな社会のニーズを受け、造形、植栽のみならずコンセプトの面でも新しい発想が生まれているようだ。



© Tomoca Aoyama



### 青山知花 (あおやま・ともか)

写真家・デザイナー。

英国コーンウォール・ファルマス美術大学修士(1999)。英国園芸著作家協会(GWG)、英国写真家協会会員(RPS)。

### Walking Barefoot with Bradstone by Sarah Eberle in collaboration with Andrew Herring

エブレー女史の「裸足で歩こう」ガーデンは、日本庭園にも通じる静寂感のあるデザイン。庭のデザインは有機的な形を多用し、腰掛けるベンチなどが庭全体に点在し、くつろぐ場所を巧みに提供している。

近年の水不足を考慮して、庭全体が雨水などを有効利用できるように考えられた最新の循環・排水システムになっている。中央を巡るカーブしたプールは、質感が異なるリサイクル素材を使用。また水位の高低差を利用して土手も作られ、裸足で歩いて触感が楽しめるようになっている。

植栽は硬質な素材とランドスケープを和らげるように、色調を緑や白に限定している。水生から陸生のものまでさまざまな質感の草類や葉を点在させている。

